

NVIDIA 東アジア AI 勢力図：日本の「勝ち筋」と 2026-2030 戦略

NVIDIAは東アジアを「補完的なAI生産圏」として再定義。台湾が製造、韓国が需要を担う中、日本は「フィジカルAI（現場データ×ロボティクス）」を主戦場とし、運用標準と信頼性で価値を握る戦略が求められる。

台湾：AIハードウェアの「供給拠点」

Rubin世代の製造、先端パッケージング、サーバー組立の世界的な中心地。



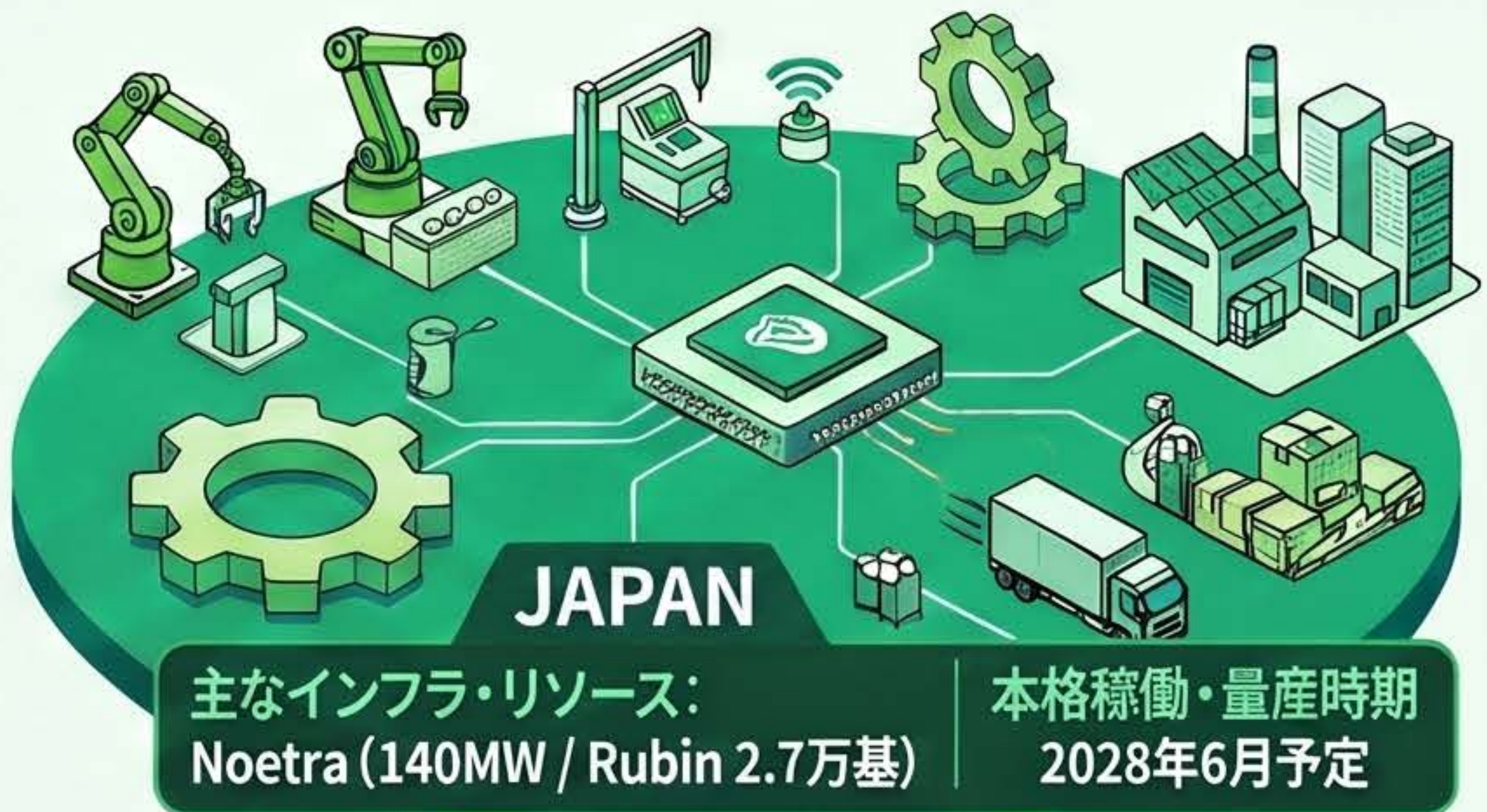
韓国：メモリ供給と「大規模需要」

HBMの共同開発と、26万基超のGPU導入構想による垂直統合モデル。



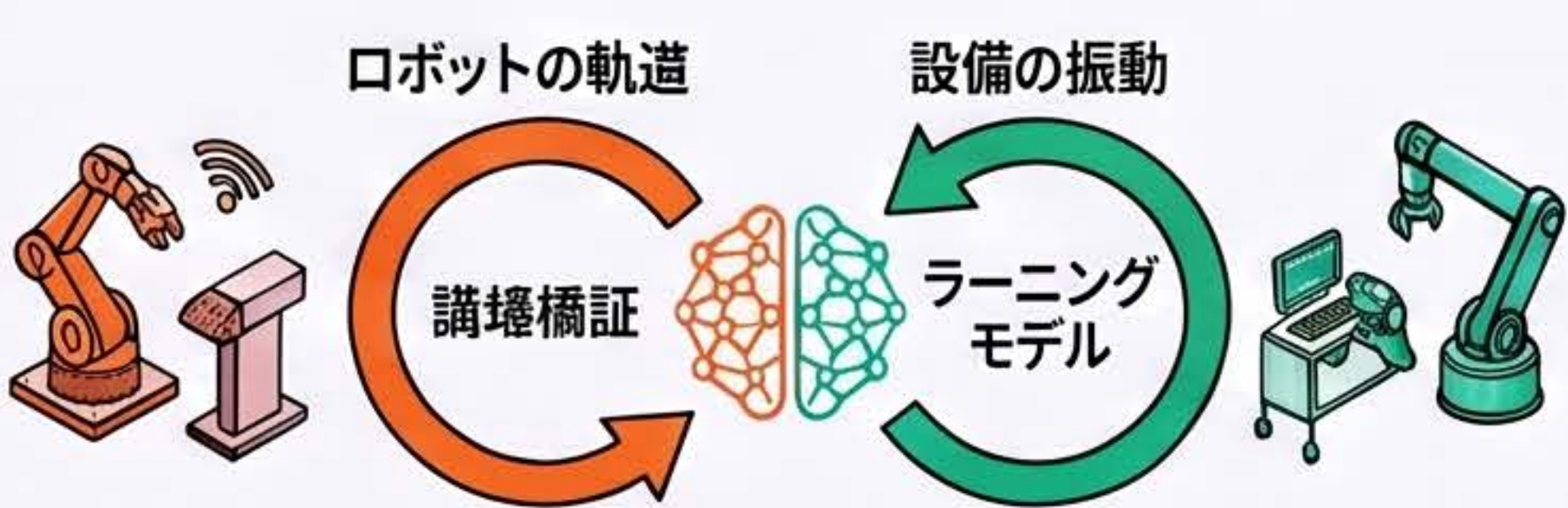
日本：産業現場と「フィジカルAI」

強い現場資産（ロボット・センサー）と高品質なデータを活用した実装が主戦場。



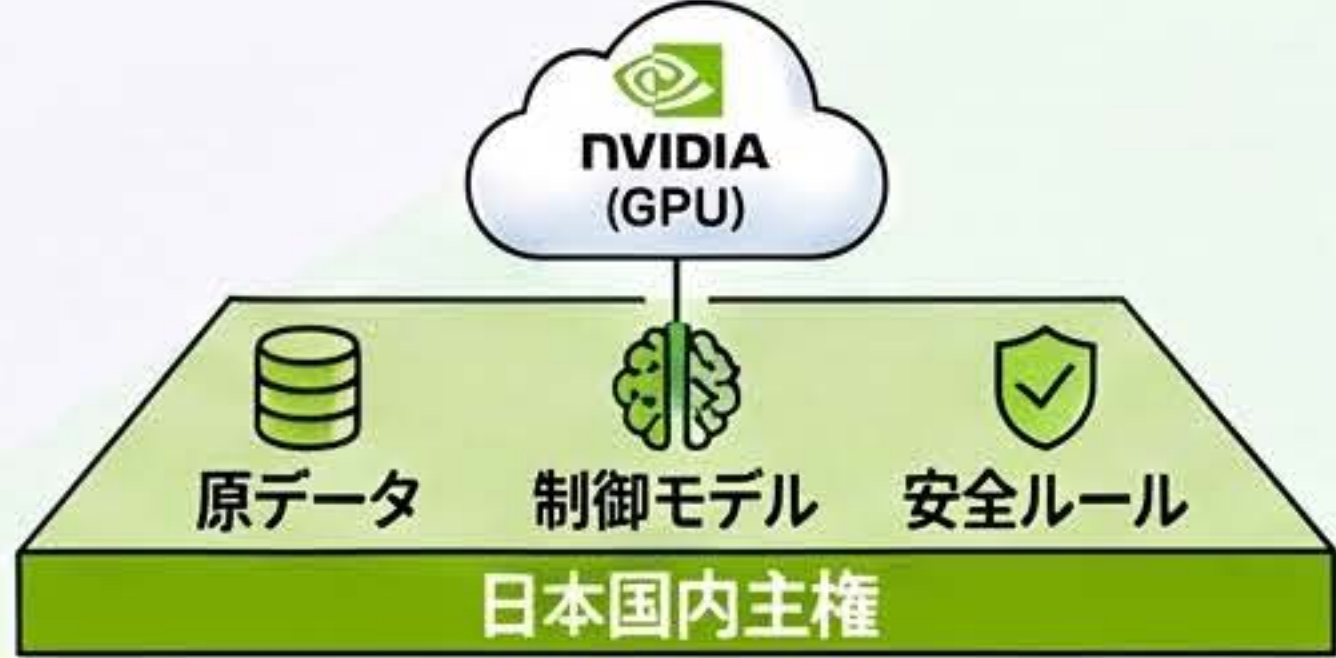
日本の「勝ち筋」：フィジカルAIの社会実装

「GPUの数」ではなく「現場データ」で勝負



日本独自の現場データを学習・検証の循環に組み込む。

依存する層と「握る層」を明確化



GPUはNVIDIAに委ね、原データ・制御モデル・安全ルールは国内で主権を保持する。

安全性と品質を「輸出商品」へ転換



誤作動が許されない製造・医療現場での安全認証や運用標準を、世界共通仕様として展開する。